最終報告書

インターンシップ研修第 9 期生　ニックネーム：いず

Ⅰ　研修の目的

3 月 11 日から一週間。――――――

3 月 18 日、私は建築家兼横浜国立大学教授をなさっている山本理顕先生と学生とが話し合うワークショップに参加していました。そこでは「建築家、建築学生は今何ができるか」という事が話し合われ、目の前に起きている地震、津波、原発問題に対して思うこと、これから被災地で起こりうる無秩序な建築バブルに対して思うこと、迅速かつしかしコミュニティーを継続させつことができる仮設住宅の在り方などを様々な視点から意見を出し合いました。

その会が発端となって、数週間後山本先生が仮設住宅の提案を行い、朝日新聞に取り上げられる程話題になりました。そういった先生の背中を見ながら、今私にできることはなんだろうということを真剣に考えていったところ、まずできることは被災地に限らず現場を知ることではないかと思いました。

私は学部期に建築の設計を専攻しており、まちづくりや商店街の活性化、超高層マンションにおけるコミュニティーの形成などを建築のハードを媒体として考えてきました。しかし、いざ実際に何をできるかを考えると、何から始められるのか、誰に話せばいいのかといった現場ならではの知識が欠如しているということを実感しました。そのため、大学院に所属している 2 年間では、実際のプロジェクトに多く参加し、そういった知識を吸収しようをいう目的を掲げました。横浜市を中心とした大学内でのプロジェクトに加え、今だからこそ福島県という現場を経験したいと思い、このインターンシップ研修に参加しました。

30 日間の研修では、会津若松をいう地で地域復興をどのようなアプローチで進めていけるのか、自分に何ができるのかを考えていきたいと考えます。

Ⅱ　研修内容

a　メディア向けモニターツアー
b　柳津温泉流おもてなし
c　グランデコ会津流朝食バイキング
d　地域特産品創出クラスター会議(南郷トマト)
e　500 円チケットラーメン＆地酒ツアー

観光復興

f　ニイダヤ復活プロジェクト
g　仮設住宅

地域復興

h　農業体験　簗田さん　渡部さん
I　FW (村上市町屋プロジェクト)

会津のアピール	地域の個性	人と人のつながり
・メディア向けモニターツアー ・500円チケットラーメン＆地酒ツアー ・農業体験	・柳津温泉流おもてなし ・域特産品創出クラスター会議(南郷トマト) ・FW (村上市町屋プロジェクト)	・仮設住宅 ・ニイダヤ復活プロジェクト ・グランデコ会津流朝食バイキング

Ⅲ　研修での気付き

会津のアピール

a　モニターツアー

1 事業内容

　会津の食の安全や現象を広く知ってもらうために、関東のメディア関係の方 30～40 名を対象として行った 2 日間のツアー。

9/17 プレゼンディナー

9/18　朝食風景

9/18　芋煮＆BBQ 風景

9/18 スタッフ集合写真

2 活動内容

事前準備	パンフレット、メニューの制作・訂正 ネームタグの作成 会場視察・前日確認	9/15　9/16
当日運営	プレゼンディナー 朝食準備・運営 BBQ 準備・運営	9/18　9/18

3 気付き

今回のモニターツアー実行を通して、まずは大きなイベントを運営することの大変さと達成感を学びました。私が参加したのは企画・計画が終わった頃の事前準備とツアー本番の段階でしたが、初日に事務所を訪れた時の他のインターン生のせわしない空気は忘れられません。

イベントを運営するのは企画や計画が一段落した後、膨大な作業が待っています。インターン初日からその真只中に飛び込んで来てしまった私は、他のインターン生と協力しながらその作業をもくもくと進めていきました。多くの人が関わっている仕事だからこそ、その間の情報共有は非常に大事で、今何がどこまでできているからマンパワーをどこに回すかという判断をしなければなりません。リーダーを中心に期限と体力と気力と闘いながら頑張りました。

大きな反省点としてとても印象に残っているのが、プレゼンディナーの直前にメニューとパンフレットの印刷がなかなか終わらず本当に焦りました。事前に部数を把握して逆算して時間管理をしておけばよかったと反省しています。

本番 2 日間は本当に嵐のようにあっという間に過ぎ去りました。プレゼンディナーや築田家での朝食会、河原でのバーベキューなど、終始スタッフとして仕事に追われていましたが、その中で参加者の方とお話することができ、貴重なお話を聞くことができました。

「ここからどうするかが重要」朝食を御一緒させて頂いた方からは、このような言葉を頂きました。会津の食の安全を PR して、メディア関係のみなさん PR してくださいという段階で終わりにするのではなく、継続的に続けていける方法を見つけた方が良いというお話でした。モニターツアーの成果を生かすためには、生産者と消費者の出会いの場の創出から、今後の展開として商品と消費者の出会いの場を創出することが重要だと思いました。例えば SA の自動販売機に置いているものから見直すなどの活動も必要なのだと思います。モニターツアーは、会津の食の紹介や安全にとどまるのではなく、それらに興味を持って参加して下さった参加者の皆様、風評被害に負けずに頑張っている生産者、そして私達スタッフの出会いの場でもあり、様々な視点から意見を交わすことのできる場となり、大変勉強になりました。

e　500 円チケットラーメン＆地酒ツアー

県外の人に向けた会津復興キャンペーンの企画。

500 円と引き換えに、ラーメンであれば 600 円×3 枚分、地酒は試飲チケット×3 枚分を受け取れるもの。ただし、twitter や face book などで情報発信することが条件。

1 活動内容

会津復興キャンペーン参加　｛ 第 1 弾ラーメンチケット
　　第 3 弾地酒ツアー

11/1　花泉カフェ

11/1　鶴乃江酒造

2 気付き

「県外の方に会津に来てもらい、応援してもらう。」という事がこのキャンペーンの趣旨であり、会津に来てもらう「きっかけ作り」のキャンペーンです。今回福島に 1 カ月いて思うのは、間違った認識や誤解を解くにはまず、「知るきっかけ」を作らなくては、自然に間違った認識がなくなることはないということです。たまたま私は、福島に 1 カ月来るといった「きっかけ」があったため、「東北＝危険」といった漠然とした誤解を解くことができましたし、私の周りにはそれを伝える事が出来ました。

今回地酒ツアーに参加させて頂きましたが、参加者が少なかったのが残念です。もっと多くの人に「きっかけ」を与えることができればよかったと思います。

ラーメンチケットや地酒チケットは今回メディアに取り上げられることになり、事務所には問い合わせの電話が殺到していました。やはりテレビの力はすごいと実感するとともに、告知の方法を事前にもっと考えておけばよかったと反省が残ります。

今後、キャンペーンが終わるまでに、多くの人に「きっかけ」を手にしてほしいと思います。

農業体験

1 活動内容

築田さん
- ピーマン・ナスの収穫
- ジャガイモの選別
- ニンジン畑・キャベツ畑・ネギ畑の草むしり

渡部柿園さん
- 柿の収穫
- 柿の選別
- 箱詰め作業(焼酎かけ、シール張り、段ボール作り、チラシ入れ)

2 気付き

「生産者に合うと、その人の作った生産物の扱いが変わる。まるで工芸品を扱うような扱いになる。」

と横田さんがおっしゃっていたことが今ではよくわかります。今では柿を見るだけで渡部さんの顔が浮かんできますし、築田さんに頂いたカボチャのおいしさは忘れられません。

築田さんも渡部さんも、原発の放射線の影響で風評被害にあっています。一時は出荷停止、出荷制限がかかり、お手伝いさせて頂いた 9 月、10 月ですら風評被害の影響で出荷するために育ててはいるものの、先が見えないとこぼしていました。

「来年の春取れ野菜を植える準備をしている。」とおっしゃっていた築田さんも、2 言目には「売れるかわかんないけどね。」とおっしゃっていましたし、大量の身不知柿の出荷伝票を抱えながらも「今年はどこまで伸びるかわからない。」と渡部さんもおっしゃっていました。

仮設住宅のお茶会に築田さんのカボチャで作ったケーキや、渡辺さんに頂いた身不知柿を持っていき、会津の生産物のおいしさをアピールしてきました。これで、少しでも大熊町の人が直売所にいってみようと思ってくだされば会津になじむきっかけになりますし、生産者のみなさんのお手伝いができればいいなと思います。

9/22　収穫したてのピーマン(築田さん)

9/22　渋柿に焼酎をかける(渡部柿園)

地域の個性

b　柳津温泉流おもてなし

会津柳津駅から程近くに広がる柳津温泉にある「花ホテル　滝のや」。

今回の震災に加え、7 月の水害によりホテルの営業ができなくなってしまいました。ホテルの営業再開に向けた建物内の清掃と、営業再開後の柳津温泉のおもてなしスタイルのアイデア出しに参加し、最終的には来秋行われる全国門前町サミットで、今回インターン生数名が作った寸劇を形にして発表します。

1 活動内容

塩田さんによる全国の門前町の現状や事例のレクチャー聴講　9/20

新しいおもてなしのアイデア出し
- 「お寺を輝かせる方法」
- 「柳津温泉全体を盛り上げる」
- 「駅からの道のりで行う寸劇のストーリー」

9/20　柳津を歩いて地域探索

9/20 アイデア出し風景

2 気付き

<u>おもてなしスタイルの個性化</u>　<u>着地型観光への移行</u>

　例えば「柳津でしかできないようなスタイルを確立し、それを独自の個性にする。」すると柳津のおもてなしはブランド化し、観光客を呼ぶ話題になるかもしれません。

花ホテルの滝のやの支配人塩田さんとそういった、普通の温泉街にはないおもてなしのアイデアを出し合いました。

　柳津には虚空蔵尊円蔵寺という有名なお寺があります。

大満虚空蔵尊（茨城県東海村）と能満虚空蔵尊（千葉県天津小湊町）と並び日本三大虚空蔵尊の１つに数えられています。また、丑年・寅年の守り本尊、3 回参拝すると一生お金に不自由しないご利益、赤べこ発祥の地柳津としての言い伝えでは物語の舞台にもなっているお寺です。

柳津にしかない地域資源を活かし、「円蔵寺を輝かせる」ものであり「柳津温泉全体を盛り上げる」方法として、駅から温泉街に歩いて行くまでの間に 10 分～15 分程度の寸劇を、お客様を巻き込みながら行うことになり、ストーリー作りからインターン生がやることになりました。残念ながら私は寸劇隊に参加できなかったため、おもてなしについて考えるワークショップまでの参加となりましたが、そこから多くの事を学びました。

その中で「おもてなしスタイルの個性化」と「着地型観光への移行」というものが重要なキーワードになりました。

多くの温泉街で、駅から送迎バスで旅館へ直行できるようなサービスが行われています。しかし。それでは温泉街の飲食店やお土産屋も含めた温泉街全体の活性化にはつながりません。温泉街を歩いて、お寺や赤べこの絵付け店などの地域資源を発見していくというおもてなしの方法は、柳津の街全体を上げた個性的なおもてなしになると思います。ぜひ来秋の門前町サミットで披露してほしいと思います。

さらに着地型観光という、観光客が自ら現地を体験しながら観光できるという要素が柳津には多く存在します。赤べこの絵付けを始めとして、円蔵時に 3 回参拝するような仕掛けを作ることもできます。そういった、地元の人に近い生活や雰囲気を体験するという観光で、柳津温泉全体が盛り上がる可能性があり、今後の方向性になるといいと思いました。

有名観光地の中には、用途地域が商業地域等に定められ住宅の建設が制限されている場所も多々あります。そういった地域で実際の地元の人の生活を味わうことは非常に難しいです。柳津では着地型観光が可能な一方で、観光と住民のバランスの良い関係を築いていく必要があると思います。住民の生活が圧迫され、負担になってしまうと、街全体のおもてなしの気持ちが失われかねません。せっかく町単位で観光を見つめなおすなら、お互いに負担にならないバランスを考えることがまず一歩目に考えるべきだと思いました。

d　地域特産品創出クラスター会議(南郷トマト会議)

南郷トマトは全国でも有名なトマトブランドで、そのトマトを使った新しい商品開発の会議が行われています。福島県南会津農林事務所・福島県南会津地方振興局・JA 会津・アドバイザーとして山際食彩工房・コーディネーターとして素材広場・南会津の飲食店やお宿さんといった面々が集まり、地域の特産品をつかった商品を開発し、地域を盛り上げようという企画を進めています。来年 1 月には「南郷トマト祭(仮)」を開催し、南郷トマトを使ったお料理を様々な飲食店で売り出し、それをマップにおとす観光事業を企画しています。

1 活動内容

第 5 回地域特産品創出クラスター分科会への同席　11/2

- モニターツアーでのトマト料理の試食アンケート結果報告
- トマト料理の試食
- 加工の仕方検討
- 1 月のイベントの打ち合わせ
- トマトドレッシングのラベル検討

只見特産㈱の工場視察

11/2　トマトのピューレ検討

11/2　工場内見学

11/1　トマトの刺身

11/1　トマト煮肉じゃが

2 気付き

地域の人に愛される商品開発をすること

会議の中で私が最も印象に残り、そしてキーワードだと思うワードです。

　南郷トマトはトマトの刺身のように、新鮮なうちに、しかも季節も限られる独特な食べ方があります。それはもともと地域の人が考えた南郷トマトおいしさを生かして食べるための知恵です。今まで、トマトの「スライス」は食べたことがありましたが、「刺身」は食べたことがありません。南郷町にしかない個性というものを売り出していくのは指針として良いと思いますが、それが独り歩きして生活と密着しなくなってしまっては、地域の姿ではなくただのパッケージ化されただけの商品になってしまいます。花泉酒造の店長さんがこの会議で非常に懸念されていたことが、「地域に浸透しない新しい商品を開発することは最初の方針とは違うのではないか」ということでした。私は商品開発に関しては素人なので、自分の畑の分野で話を展開すると、都市計画の町並み保存についても同じだと思います。例えば地域の人の生活も何も関係ない町並み保存は、ただのテーマパークと同じだと思います。町並みを保存する事は地域のライフスタイルを継承していくという事でもあります。つまり、地域の人の手を離れたものではなく、そこで愛され続けてきたもの、そして愛され続ける物をどう継承・創造していくかということが重要であると思いました。

I　FW(村上市町屋)

新潟県村上市はかつて城下町として栄えた町です。
そのため城下町としては「当り前」な町屋、武家屋敷、寺町、城(跡)が揃っています。しかし多く存在した城下町にそれらが揃っている町は数少なくなってきてしまっています。村上のように武家町と町人町の両方の町の構成要素が残っているものは全国でも珍しく「当り前」があることが今、町の地域資源になっているのです。

その中でも村上市の町屋は今でも店として或いは観光所として使われながら残っています。(武家屋敷は一般公開する形で残っています)

平成 9 年、道路の拡幅工事に伴う近代化計画、つまり町屋の建て替えの話が持ち上がりました。その折に、まだ町屋の価値について認識がなかった商店街の住人に、会津若松の五十嵐大祐氏と村上市の吉川真貳嗣氏が町屋の価値を説き、町屋に光を当てながら商店街の再生をする案を提案したことが始まりです。

町屋は一歩店の奥に進むと、通り庭(通り土間)を通って囲炉裏や和小屋の力強い梁、大黒柱に神棚仏壇、豪快な吹抜けが現れる、町人町特有の建築様式です。かつて商売と生活が密着して行われていた事、間口をせまくして奥深く続くうなぎの寝床のような構造をしている事、通り土間に溢れでる生活感など、すべてが村上の町屋が作り出した個性です。町並みや建築を保存する事は地域のライフスタイルを継承していくという事だと考えます。村上では町屋の公開も同時に行っているので、お店に入ると「町屋見てって」と中に案内してくれます。そこには囲炉裏や箱階段といった生活が広がり、確かに今でも建築と一緒に生活様式が継承されていることがわかります。「冬が寒いことや維持は大変。」とお店の方はおっしゃっていましたが、建て直そうとは思わないそうです。おそらく町並み保存規制がそれほど厳しくない村上でそのように考えていらっしゃるのは、町屋が一軒だけ残っているのではなく、町単位で保存しているので町並みに自分が参加しているという意識があってのことだと思います。資本主義に支配されたテーマパークのような生活を離れた町並みではなく、生活を継承しながら地域と一体となった都市計画の価値が全国に広がってほしいと思います。

10/30　町屋のある町並み

10/30　町屋　囲炉裏と箱階

10/30　町屋　通り庭

10/30　町屋　見世

10/30　町屋　武家屋敷

人と人のつながり

d　仮設住宅

大熊町は全町民約11000人、世帯数：3955が全国各地に避難しており、仮設住宅建設戸数は1124戸、仮設住宅建設箇所数(団地数)14が設置されています。現在、会津若松市内にはそのうち9 箇所設置されています。

大熊町は福島第一原子力発電所から半径20km 圏内の「警戒区域」、つまり強制的に立ち入りが制限されているため、町民は指定された一時帰宅日にしか家へ戻ることができないそうです。

1 活動内容

東部公園仮設住宅(50 戸)
- 仮設住宅の訪問
- 今後の活動スケジュール調整

扇町 1 号公園仮設住宅(82 戸)
- 仮設住宅の訪問
- 今後の料理教室開催を自治会長様に依頼

松長近隣公園仮設住宅(240 戸)
- 住民の方への聞き込み調査
- お茶会への参加
- 大熊町ふるさとまつりの参加

2 気付き

私が一番多く関わらせて頂いたのは松長近隣公園の仮設住宅です。そこには特徴的なものがいくつかありました。

松長近隣公園仮設住宅の「おみせやさん」

10 月 7 日現在、213 戸に 441 人が入居している仮設住宅ですが、近くに商店が少なく、車を持たない高齢者などから「仮設住宅の敷地内に店舗を作ってほしい」という要望があがっていました。そこでついに 10 月 17 日に「おみせやさん」が仮設住宅敷地内にオープンしました。運営は大熊町商工会の会員１３事業者が担い、店舗はプレハブ平屋で、広さ約２４０㎡。肉や野菜、洗剤、電池などを販売します。飲食や談話ができるフリースペースを店内に設けており、住民の交流の場としても活用されています。運営する事業者も大熊町から同仮設住宅などに避難している方で、お店がオープンした折には懐かしい面々と再開するために、遠くへ避難されている方も来店されたそうです。今後、会津若松市は厳しい冬の雪の時期を迎え、松長団地に住む人も中心部へ出ることが困難になることが予想されます。そんな時、「おみせやさん」は仮設住宅の人だけでなく。松長団地の人も今以上に利用するのではないかとお店の人は話していました。地元の人と大熊町の人の交流の核になる施設になるのではないかと思います。

営業中！「理容室」

仮設住宅の一角に理容室の幟が立っています。ここでは、被災される前に理容室を営んでいらっしゃった夫婦が、仮設住宅に移ってから、夏に営業を再開されたそうです。

お話をうかがうと、地震以前に常連だったお客様が「また始めたんだね！」と会いに来て、いまでもまだ利用し続けてくださっているそうです。ただ、本格的に営業するにはさらに多くの申請を保健所等にしなければならず、お金もかかるため、仮設住宅内の営業に止まっているそうです。

青空喫茶！

自治会長の奥さんが家の前に手作りのテーブルと椅子を出し、通りがかった人にお茶や茶菓子を振る舞ったことから始まりました。見知らぬ土地に避難してきて心細い思いをしている人を励ましそうと、顔も知らない人にもお茶を振る舞い、始めた青空喫茶は、今では青空の下の社交の場となっています。また、毎月5の付く日に集会所でお茶会を開催するなど、住民が積極的に交流の場を運営しています。

今回、11月5日のお茶会に参加させて頂きました。
ちょうどその日は松長の仮設住宅内で、「大熊町ふるさとまつり」が行われており、仮設住宅内は大にぎわいでした。

道端でもお茶会の席でも至る所で「久しぶり！元気だった？」という会話がされ、中には涙を流して抱き合っている方もいました。大熊町ふるさとまつりは、毎年この時期に行われているそうなのですが、今回のおまつりでは各地に避難されている大熊町の方が集まる機会になっていました。借り上げに住んでいて普段大熊町の方に合うことができない方、千葉の親戚の所から駆け付けた方、遠くからもたくさんいらしてました。

お茶会では、避難生活を転々としていた時の話や、今住んでいる地区で地元の農地の一角を借りてまた、農業を始めたというお話など、本当にたくさんのお話を聞く事が出来ました。他にも、大熊町の情報収集としたくても、パソコンが使えないため、月に一回教室

を開いて欲しいなどの意見も聞けて、大熊町の方とたくさんお話できました。非常にいい機会でした。

仮設住宅での暮らしをどうしたら少しでも快適に、そして楽しいものになるのかいろいろと今まで考えてきましたが、最後の最後に今仮設住宅に住んでいる人の素直な意見を聞くことができて本当に良かったです。

11/5 大熊まちふるさとまつり

11/5　お茶会の風景

11/5　ライブペイント会場

11/5　描いたパネルを仮設住宅に設置

f　ニイダヤ復興プロジェクト

震災により、いわき市で魚の加工業を営んでいたニイダヤ水産の工場は浸水の被害を受けてしまいました。素材広場ではニイダヤ水産の復活を支えるべく、物産販売の収益を真空機購入費にあてたり、加工原材料の魚を新潟県粟島から仕入れるルートを開拓したりといったバックアップをしています。

1 活動内容

粟島干物加工場の視察　　9/14

第一回協力依頼・検討打ち合わせの同席

2 気付き

「私達はお見合いをセッティングしているだけ。そこからは本人たち次第。」

と横田さんがおっしゃっていたのが印象的でした。

研修 2 日目で粟島に行き、会議に参加したことで人と人をつなぐ仕事というのはこうゆうことなのかと実感しました。

加工技術はあるが魚が手に入らないニイダヤ水産、一方で豊富な海の幸が多いが加工技術が未発達な粟島。この 2 つを引き合わせるためには、事前に情報を収集しておかなければならず、もっと言えば出会うはずのない両者をコーディネーターが知っていなければ出会わないということです。ただ両者のニーズを聞き、プランを練るという単純なものではなかったのだと実感しました。

「福島の魚は必ずいつか復活する！だからその時のために、ニイダヤさんの加工技術は必要なんだ。」という思いでニイダヤさんの復活を願っています。

9/14　粟島へ

9/14　粟島加工場視察

9/14　大漁旗を振る神蔵さん

9/14　粟島プロジェクトメンバー

c　グランデコ会津流朝食バイキング

　会津裏磐梯に位置するホテルグランデコの朝食改善計画。
会津の伝統工芸である漆器と食材を融合させた会津流朝食バイキングの提案。

1 活動内容

ホテルグランデコと第一回打ち合わせ　朝食視察　9/26
　　改善案の企画書の説明

9/26　朝食会場の様子

9/26　現在の朝食

2 気付き

「会津に来たら、会津の食を！」
という素材広場ならではのプロジェクトです。
打ち合わせの際に、メディア向けモニターツアーのプレゼンディナーで行った会津漆器との食材のコラボレーションの写真を見ていただいたり、今までお手伝いに行っていた農家さんに食材を依頼する話をしたり、粟島視察の際にお会いしたニイダヤさんの加工品を使うという話が出たりと、今まで関わらせていただいたプロジェクトがひとつにつながるような感覚を味わいました。

　横田さんが以前言っていた「人をつなぐ仕事は、情報をたくさん知っていなければならない。」とおっしゃっていたのはこういったことなのだろうと実感しました。会津の食材で朝食を作ろうしているお宿さんがいて、会津で野菜を育てている農家さんがいること。ほっておいてもこの 2 つが勝手につながる可能性は低く、そこにコーディネーターが必要になります。両者の要望や思いを事前に知っているからこそ、このような事業ができるのだと思います。

Ⅳ　研修を通して

「百聞は一見にしかず。」ということを１カ月で実感を持って学びました。
実際に自分の足で歩いて、自分の目で見て、直接お話しして様々な事を知り、経験しました。

「個人の弱さと個人の強さ」これが 30 日間で最も感じたことです。
こんなことがしたい、あんなことがしたい、と自分なりに会津のためにと考えるのですが、それを実行するとなると、どうしても個人の力ではその場を設定することができません。今まで大学で行ってきたワークショップや住民との意見交換会など、教授や大学の肩書を土台に出来ているものでした。しかし、それらの肩書を捨てて自分個人に戻った時、私個人の無力さというものを感じました。特に仮設住宅では、集会所をどう使っていくべきかというワークショップ等やりたいことはたくさんありました。しかし、その突破口が見つからず、何もできない事が非常に悔しかったです。

ところが、個人というものは弱さというものと同時に強さを持っていました。個人だからできるフットワークの軽さで様々な人に出会い、お話を聞く。すると思わぬところで話がつながって解決法が見えてきたり、或いは話が展開していきました。人との出会いやつながりの力というものは本当にすごいのだと実感しました。仮設住宅の話ばかりですが、松長の仮設住宅の「おみせやさん」で情報を仕入れ、「サロンふみえ」を見つけ、最後に大熊町の方々とお話できたのは本当に貴重な体験をさせて頂いたと思っています。

今後私は会津、そして福島のためにまず、この経験を多くの人に伝え、みんなが会津、福島を知る「きっかけ」になりたいと思います。